

# 「辺野古新基地建設断念」から

## 始まる日本の民主主義

実はげげしく厳しい、じりじりと皮膚を焼く灼熱の太陽の下で、辺野古・大浦湾の埋め立てを阻止する人々の非暴力の抵抗が続いています。

事が起こる前の6月と7月を跨いだわずか1週間足らずですが、高江と辺野古の現場を訪ねました。

### 仲井眞知事による公約違反の

#### 埋め立て「承認」、その後の沖縄

高江は3月から6月いっぱいには天然記念物ノグチグラの繁殖期なので防衛局も工事を行わない約束ですが7月から工事が再開されます。高江住民の会は6月29日に「座り込み」7周年報告集会を持ち、450人を結集して阻止の決意を固めています。予定されている6ヶ所のヘリパットのうちN4-1とN4-2の2ヶ所が完成されていますが、現在はN1地点の工事を阻止するための監視活動が行われています。N1地点は県道70号線に面した表ゲートと南側の農道につながるN1裏の2ヶ所でテントを張って24時間体制で事に備えています。私はN1裏で監視活動に参加しました。

N1地点の工事は県道と農道までの旧林道の尾根筋を工事用道路として利用することになっていますが、現状では数か所の路肩が崩落しており工

事用車両の通過は不可能といわれています。

そのため防衛局は旧林道を整備し工事用車両とすするために、県の赤土流出防止条例に基づく事業行為通知書を5月に提出していました。

ところがその防衛局の通知書の内容には問題が多く赤土の流出を防ぐのは不可能なため住民の会は再三にわたって県の環境保全課に申し入れを続けていましたが6月に県は通知書を承認する確認済み通知書を出してしまいました。もちろん住民の会は直ちに「確認済み通知書」を出すことへの強い抗議と共に、防衛局に対して工事を着工させることなく、抜本的な赤土処理対策を講じさせることを求める要請文を県に提出しています。

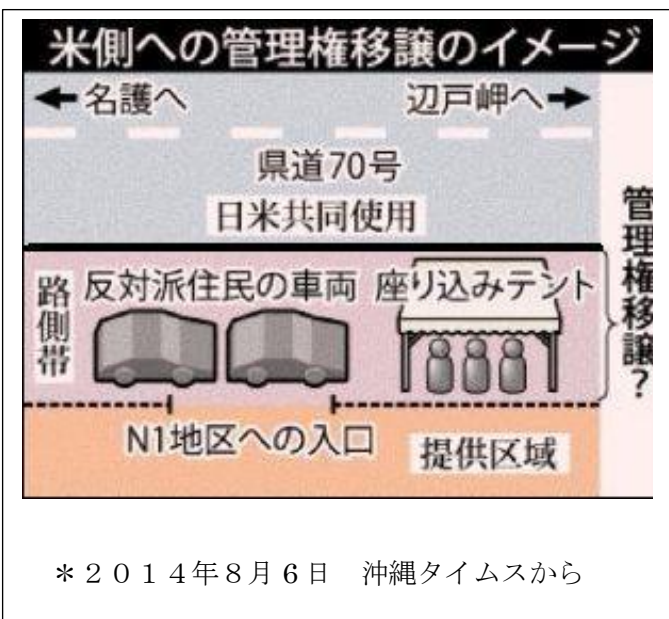
そのほか、住民の会は現在二つの懸念を抱えています。

いずれも防衛局側の動きとして新聞で報道されたものですが、一つは、住民がテントや車両を置いて「座り込み・監視場所」にしていた県道70号線に面したN1ゲート前の路側帯を、米軍占有区域に戻し管理権を県から米軍に移譲し住民を排除しようというもの、(※図)二つ目は、完成した地点N4の2ヶ所の離着陸帯(ヘリパッド)を基地返還を待たずに、先行して米側に提供するというものです。路側帯の管理権を移譲することも、離着陸帯の先行提供も、「そこに住む住民の平和的生存権」を今以上に脅かし、日米政府自ら決めた「沖縄の負担軽減」という日米合意にさえ違反した姑息で恥ずべき手法です。これでは既存の基地

に、新たな基地が加わって騒音や墜落の不安が増し、負担は軽減するどころか増大するばかりです。

住民の会は事態の把握と対応について県に問い合わせていますが、「現時点で事実関係は確認できていない」との、通り一遍の回答で、積極的動きは今の県政には既に期待できないようです。

沖縄市民連絡会共同代表で建築家の眞喜志好一氏は「労働情報」誌のインタビューで仲井眞知事の公有水面埋め立て法違反の不当な「承認」に言及しつつ「仲井眞知事が埋め立て承認に舵を切ったため、彼を補佐し、間違いを正すような位置の副知事らが抵抗しなくなりました。それに伴い各部署が沈黙するというとんでもない状況になっています。」と述べ、映画『ハンナ・アーレント』でナチス親衛隊アイヒマンが裁判で、命令に従った



までだと主張し続ける「悪の凡庸さ」に県政の現状を重ね、日本政府の命令に従ったまでという沖縄県知事も、さらに二人の副知事もリトル・アイヒマンであり「命令に従ったまでだとして県の幹部たちが、職業としての誇りや責任を放棄している」と「承認」後の仲井眞県政を指弾しています。

辺野古の海上では海の安全を護るために海上保安員となったはずの職員が基地建設に関しては中立の立場だとしながら、カヌーで抗議する人々を法的根拠も示せないまま拘束したり、羽交い絞めにして頸椎捻挫を負わせるなど、平素の業務では考えられないほど人間性を歪められた行為に及んでいます。それも命令に従ったまでだという事でしょう。それこそ「海猿」としての誇りや責任を問い質したいものです。

事態が荒れてくる前の7月3日、船が出るというので乗船しました。晴れて真っ青な海と空は目眩を感じるほど幻想的で美しいが辺野古の海で油断はできません。海上で広大な制限水域を確認し、テールサンゴをみて珊瑚礁の固着が発見された鍾乳洞のある長島をひと回りしました。その間、10隻の警戒船が出ていたようですが、2隻が距離を置いてついてきただけで、まだ特別な妨害はありませんでした。

8月21日の琉球新報の記事によると、現在辺野古海上には、全国から派遣された海上保安庁の巨大な巡視船19隻と防衛局の警戒船・海保のゴムボート約60隻がひしめいているとのこと。市民の船はカヌー隊を含めてわずか20隻、カヌー

で抗議に出た市民は、「まるで戦争だ」と、沖合から陸上を睨んで配置された船団の威嚇的な様子を語っています。

辺野古の陸上、米軍基地キャンプシユワブのゲート前でも、工事資材を運ぶトラックに、本工事がアセス法に違反していること、県民の7割以上が反対していることを告げて、引き返すように説得しています。

辺野古の老婦人(84歳)が杖を突きながらも、ついにトラックの前に立ちふさがり、運転手に訴える場面もネットで報告されていました。

「沖縄戦」から今日まで、84歳という年齢を重ねると、一人立ち塞がったその決意の背に、島ぐるみで立ち上がる県民の意思が重なり、今、沖縄から戦後日本の民主主義を問うているのだと気が付いた。

連日抗議に集まる人々に対して県警機動隊、防衛局職員、米軍、民間警備員(アルソック)が物々しく立ち並び強権的な排除が繰り返されています。シユワブ第一ゲート前には「殺人鉄板」と市民が呼ぶ三角形の鋭い山形が牙のように突き出した分厚い鉄の板が敷き詰められました。防衛局は、市民の撤去の要請にトラックの泥落としてであり工事終了まで撤去の予定はないとしているが、泥落としなら基地内に設置するべきで市民の歩道を占有すべきではない。地元の新聞社説では「市民と警察官のもみ合いが連日起きていてゲート前に、鋭角の突起物並んだ鉄板を設置することがどれほど危険か、防衛局の担当者が知らないはずはない。米



軍統治下の反戦・反基地運動のさなか、憲兵隊は銃剣を突き付けた。基地のない平和な島を希求する大衆運動に対する威嚇行為だった。その非人道的な行為が普天間の辺野古移設の名の下に再現された。これも安倍内閣の専横の表れだ。」と記しています。

### 「辺野古基地建設阻止」は

#### 安倍政権へのボディーブロー

さて、1995年の少女暴行事件に端を発した「県民の怒り」を逆手に取り、日米政府は翌96

年、沖縄の「基地負担軽減」を謳い文句に「普天間基地の全面返還」を約束してSACO合意を発表した。ところが内容は未使用の米軍基地をわずか2%整理縮小し、新たな最新鋭の基地を辺野古に作る、米軍の再編が目的であった。しかも辺野古の基地建設は米軍が1966年のベトナム戦争時代から狙っていたものでタイミングを見計らっていた。沖縄の人々はアメリカの公文書から独自の調査で日米政府の「騙しの手口」を解明し、市民投票や事あるごとに県民集会を開いて辺野古の基地建設に反対する民意を顕わしてきた。しかし2004年のイラク派兵をした小泉政権の下で、やはり辺野古の基地建設が強行されようとした、人々はそのためのボーリング調査を阻止し辺野古沖の建設を断念させた。辺野古のお年寄りを中心に辺野古浜で「座り込み」監視活動を18年間続け、辺野古が「戦争の道具」になることを止めてきた。しかし、ここにきて安倍政権の下、再び大変な勢いで辺野古基地建設が強行されている。

政府は、辺野古の環境アセスの科学的調査と民主的手続きを形骸化したまま、2011年12月28日午前4時、閣議のうちに市民の監視の目をかい潜って、アセスの最終手続きである評価書を提出した。当時の地元紙は「科学を装いながらこれほど非科学的な政府文書を見たことがない・環境への影響をひた隠しにする文書はアセスの名に値しない」と評し、12年2月の知事意見で仲井眞知事は「環境の保全は不可能」として、あらためて「普天間基地の撤去と県外移設」を求

めたのである。その後、環境の保全措置は改善されないにも関わらず、仲井眞知事は13年12月27日、唐突に政府の「公有埋め立て申請」を承認して県民を裏切った。地元紙は次のように糾弾した。

「知事の声明は法律の適合性についての根拠が曖昧なほか、安倍政権の基地負担軽減策を恣意的に評価しており、詐欺的だと断じざるを得ない。

沖縄戦でおびただしい数の犠牲者を出した沖縄の知事が悲惨な歴史を忘却し、軍事偏重の安全保障政策に無批判なまま、沖縄の軍事要塞化を是認したに等しい妄言である。今を生きる県民だけでなく、無念の死を遂げた戦没者、沖縄の次世代をも冒瀆する歴史的犯罪と言えよう。

沖縄戦で本土防衛の「捨て石」にされた県民が、再び「捨て石」になる道を知事が容認することは許されない。(一部抜粋編集)

知事の「埋め立て承認」で揺らいだかに見えたオール沖縄は、2013年1月28日に安倍首相にオスブレイの配備撤回と米軍普天間基地の撤去・県内移設断念を求めて提出した「建白書」の実現に向けて、様々な立場を超えて未来を切り開く島ぐるみ会議を再構築した。

早速この8月23日、辺野古埋め立て阻止の集会を辺野古のキャンプシュワブ第一ゲート前で開き、3600人を結集した。ヘリ基地反対協の安次富さんは、「沖縄は勝てる!」と挨拶で拳を握りしめた。

しかしその後モカヌー隊への暴力的拘束を海上

保安庁はやめてはいない。現場で指揮を執る山城ヒロシさんは沖合に停泊する海上保安庁の母船「くにがみ」1700トン、全長96メートルという大型船によじ登って、拘束された3人の仲間を取り戻した。「犠牲者を出さない!」、現場のリーダーたちの覚悟は並大抵ではない。

それにしても、これが民主国家かと思わざるを得ない。

知事を挿げ替えなければ沖縄県政の状況は変わらない。今年11月16日には沖縄県知事選があります。建白書を携えて上京した翁長雄志氏(現那覇市長)の圧倒的勝利で辺野古埋め立て承認を撤回させるまで、辺野古に土砂を投入させるのだけは防がなくてはなりません。

天然記念物のジュゴンが棲み、サンゴの博物館と呼ばれ、今も36種以上の生物が発見されるほど生物多様性に富み、沖縄の思想文化を育み、観光の汲みつくせぬ資源ともなる豊饒な海です。

アメリカの文化財保護法の対象としても認められ、米国防総省を被告にしてジュゴンの保全措置を取るよう訴えている裁判も辺野古埋め立て中止を求める追加申し立てをして裁判が再開しています。

どうか、辺野古に足を運んでください。政府の暴走を止め、沖縄の民意と人権を保障する、立憲主義の本旨を私たちの手で実現しましょう。

辺野古基地建設の阻止は、間違いなく安倍政権へのボディブローとなります。